

外来がん化学療法患者の副作用重症化防止に向けて 薬局薬剤師が果たすべき役割

寺腰 崇志¹⁾、青木 隆¹⁾、長久保 いぶき¹⁾、齋藤 希衣¹⁾、川井 亜由葉¹⁾、
本波 茉耶香¹⁾、深井 麻利¹⁾、保坂 茂²⁾、小山 貴史³⁾、前田 守⁴⁾、長谷川 佳孝⁴⁾、
月岡 良太⁴⁾、森澤 あずさ⁴⁾、大石 美也⁴⁾

- 1) 株式会社あさひ調剤 あさひ調剤薬局立石 2 号店
- 2) 株式会社あさひ調剤 はなまる薬局毛呂山店
- 3) 株式会社あさひ調剤 運営研修部
- 4) 株式会社アインホールディングス

【目的】 がん治療は外来治療にシフトしつつあり、次回受診時や来局時までには副作用が発生する可能性が考えられる。副作用の重症化防止には、早期発見と医療機関との連携が必須となる。そこで、外来がん化学療法を受ける患者の副作用発現状況と医療機関への相談状況を調査し、薬局薬剤師が果たすべき役割を検討した。

【方法】 2019 年 8 月 1 日から 2020 年 3 月 31 日に当社薬局 9 店舗に来局した S-1 またはカペシタビン服用患者 23 名に対し、過去に発生した 6 症状の副作用(嘔吐、吐き気・悪心、下痢、口内炎、しびれ、手足の赤み・痛み)に関するアンケートを実施した。主な項目は「副作用発現歴」「症状の強さ(CTCAE)」「医療機関への相談」とした(アイングループ医療研究倫理審査委員会承認番号:AHD-0044)。

【結果】 17 名(73.9%)に副作用経験があり、吐き気と下痢が各 9 名(52.9%)と最も多かった。症状の強さは、下痢については Grade1 が 8 名(88.9%)、Grade2 が 1 名(11.1%)、吐き気については Grade1 が 5 名(55.6%)、Grade2 が 3 名(33.3%)、Grade3 が 1 名(11.1%)であった。副作用の多くは、治療開始後 1 週間以内に発現していた。副作用経験者 15 名(88.2%)に医療機関への相談経験があり、31 件の全相談事例は来院・来局時に行われた。

【考察】 外来がん化学療法の開始後 1 週間以内に副作用が多く発現したことから、次回の来院・来局時までには副作用が発現している可能性が考えられるが、患者からの電話相談はなく、来院来局時まで我慢している可能性が示唆された。副作用の重症化防止や患者 QOL 向上のためには、早期発見が重要となる。したがって、薬局薬剤師はかかりつけ機能を発揮して患者の身近な相談相手となるように努め、副作用の好発時期には積極的に電話確認するなどの介入も重要と考える。

(第 31 回医療薬学会年会(2021 年 10 月, Web)にて発表, 一部要約)